（別紙様式）【特色あるフロンティアスクールの取組事例①】

都道府県番号	２１
都道府県名	岐阜県

（①□　②☑　③□）

1　学校名及び規模

海津町立高須小学校										
	1年	2年	3年	4年	5年	6年	特殊学級	計	教員数	
学級数	2	2	2	2	3	3	2	１６	２６	
児童数	６５	７１	７７	７５	８１	８５	7	４６１		

2　実践研究の概要（主題（テーマ）及び設定の趣旨）

・主題（テーマ）

『一人一人が分かる喜びを味わい，自ら学ぶ力を身に付けていく子の育成』

～算数科を切り込み口にして～

・テーマ設定の趣旨

・学習集団づくりを基盤とし，児童一人一人が仲間と共に学び，分かる喜びを感じ取る授業を進めることにより，児童は自分で学習を進める力を身に付け，基礎的・基本的な内容を確実に身に付けることができる。

教師はそのために，授業の出口における願う児童の姿を具体的に描き，一人一人全ての児童がその姿になるための指導・援助を具体化し，児童が自分で問題解決できるよう個に応じて適切に働き掛けることを通して，個に応じたきめ細かな指導ができる資質を身に付けることができる。

3　実践研究の内容について（選択した観点を中心に記述）

（ｉ）研究体制の工夫

【研究推進委員会】

・校長，教頭，研究主任，教務主任，生徒指導主事，算数科主任，少人数加配教員，低・中・高学年少人数担当で組織し，年間１７回の研究授業の計画立案及び成果と課題の明確化を行う。

【全校研究会】

・年間７回（各学年１回と特殊教育１回）の全校研究会を行う。

【低・中・高学年研究部会】

・低・中・高学年部会を研究の母体とし年間１０回の授業研究会を行う。

【研究推進の方法】

①指導案を部会で検討する。

②研究推進委員会において指導案を検討する。

③事前研として職員全員参加（部会研の場合は部会所属の職員）のもとに模擬授業を実際に行い，指導者の発問や指導・援助を細かく検討（必要に応じて修正）する。

さらに，児童の主体的な学習の成立を願った指導・援助を共通理解し，願うノートづくりのための主な働き掛けを授業参加の視点として明確にする。

④授業公開（③において共通理解した視点に沿って参観する。）

⑤授業後の研究会で，授業の流れに沿って児童の姿をもとに研究会を進める。

ねらいが達成できたかどうかは学習プリントへの記入状況や自己評価状況を集計し，願うノートづくりにつながった授業者の言動や改善すべき言動と修正案を究明する。

⑥⑤で明らかになった内容を「全研だより」「部会研だより」として全職員に配付し，次の実践に生かしている。

全研便りによる修正案の提示→（抜粋）

視点　本時のねらい「ブロック操作を通して、１０いくつから１位数をひいて、差が１位数になる減法の計算のしかた（減加法）がわかる。」を達成し、学ぶ力を向上させるための指導援助はどうあったらよいか。

授業者の主張）	子どもの姿	研究会で明らかになったこと
を用意し、問題の り大れ個に応じた 題を正しく把握す	◎立式できた子１４名 ・個別指導により２名も正しく立式できた。 ◆わけまでかけた。７人。 ◎めあてが正しく書けた１６名	1、次のことが、子どもの学習を意欲的にした。 ①教師の言葉が省かれていた。 （問題提示）・「分かっていること」（待って手で合図）「では」。 ②（式の書けない子への援助）「後ろへきて」「はじめうさぎは」「どうしたの」「うごかして」教えず気づかせるための活動をさせた。 ・問題から立式まで、すっきりと流れた。 2、めあてづくり
めにどんなところ 自分なりに考える	◎方法 ・ブロック 13 人 ・ず　　9 人 ・数え引き（結果０人） ・両方　　1 人	「１３－２」のひきざんをできるかどうか問い、これならすぐできるが「１３－９」だとできないのはなぜかと問うと子どもから課題を出すことができるのではないか。 課題「３からひけないときのひきざんのけいさんのしかたをかんがえよう」 ・このように低学年では一般化した言葉で課題を表現しなくてもよいのではないか。
ブロックなどを、 で、どの子も自分 た。	◎１０からひくやり方を多くの子が行っていた。 ・３からひいていた子３人	3、子どものすばらしい姿（ＩＴ）を価値付け紹介し、その話し方をみんなに広めるとよかった。 （ 違う意見の子も自信を持って話せるようにしていく日頃からの指導が大切である。）
をしながら一人で で、減加法のやり	◎全員が正しい答えを出すことができた。	4、時間外 練習問題をさせることによって、減加法を習熟させることができた。 （練習問題は習熟に必要である。）
	◎自己評価 花丸１人、満足１３人 むずかしい２人 (満足感を持っていた)	

（ⅱ）実践研究の内容

①　学習プリントと補助プリント（教材）の作成

一単位時間毎に用いる学習プリントをノートとして用い，学習の中核として重視している。本時の学習内容の確認となる練習問題を用意するとともに，児童の実態に応じて発展的な内容として「どんどん」コースの問題や補助問題を用意し，個の学習状況に応じて取り組むことができるようにしている。

＜学習プリント作成の４つの意義＞

ア　ねらいを明確にする手だてとして（評価の窓として）

・具体的にどのような書き込みがされれば本時の学習が成立したのかを明確することを大切にしている。よって，一時間終了時のプリントの記入具合が，児童がどれだけねらいに迫ることができたかの評価であり，教師の指導・援助の評価でもある。

イ　指導・援助を明確にする手だてとして

・①に基づき，願う書き込みを児童が自らの手で行うことができるためには，教師が個に応じてどのような指導・援助をすればよいのかを明確にしている。

このことは，個の実態に応じた指導ができるための子どもづかみや教師の働き掛けをより，的確にするための絶好の研修となっている。

ウ　教師の共通理解のための手だてとして

・少人数を共に行う教師同士が話し合いながらプリントを作成したり，事前に学習プリントに書き込み，本時の指導内容やポイントについて交流したりすることで，共通理解に立ったＴＴや少人数の指導ができるようにしている。

エ　児童が算数の力とともに，学び方を身に付けるための手だてとして

・自ら学ぶ力をつけていくためには，「どこに何を書くか」，「どのように考えていくか」といった初歩的な学習からはじめ，徐々に自分自身で考えながら適切に学べるようにしていく必要がある。そこで，学び方が身に付くに従い，プリントの内容を簡素化していくことを大切にしている。

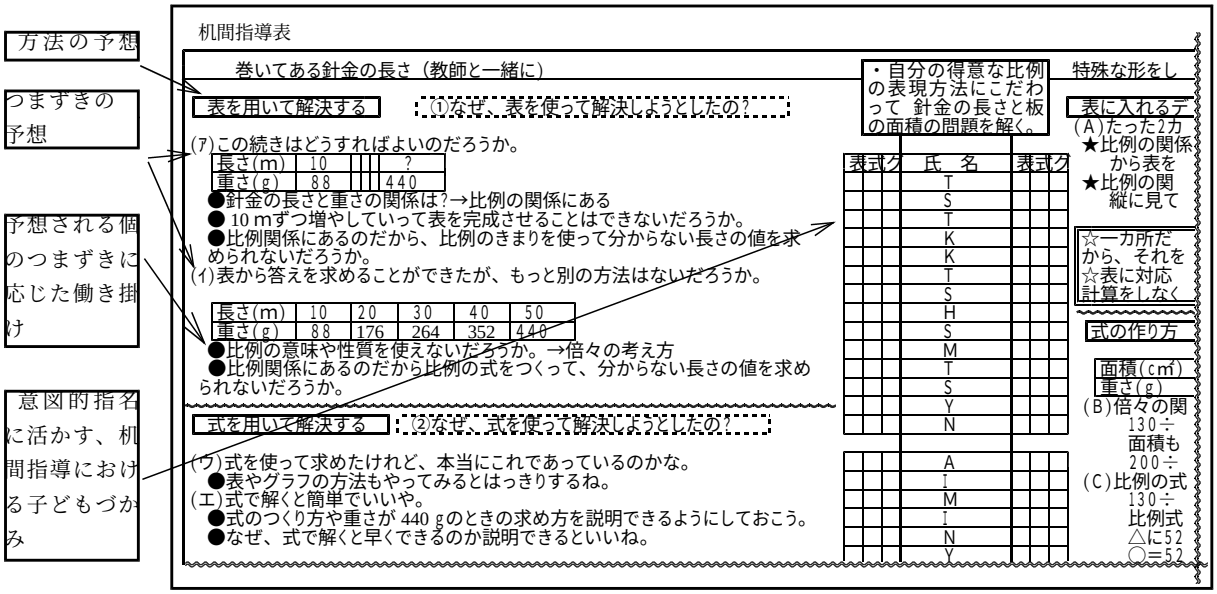
例　示された図に書き込む段階 → 図自体を自分で考えて描き書き込む段階

↓

○で囲む，矢印を入れる等，考え方が分かるような書き込みができる段階

② 机間指導表の作成

課題に対する児童一人一人の予想される見方・考え方を事前に検討し，その思考のタイプ別に，その子が自分の力で課題解決を図るためにはどのような活動をさせればよいかを具体化し，そのための指導者の働き掛けを具体的に記入した机間指導表を作成し，一人一人に対応できるようにしている。



また，一人一人の児童がどのような考え方で解決を図っているかを机間指導表上の名簿に記入し，全体の意見交流の場での意図的指名に生かすことで，練り合いを深め，ねらいとする考え方を児童自らが見つけ出すようにしている。少人数指導やティーム・ティーチングにより１人の教員が少人数の指導にあたることができるため，この机間指導表は大変有効な手段と考える。また，この机間指導表を作成する過程において児童の思考を教材とのかかわりで十分に検討することが，教師の指導力向上につながっている。

（iii）成果と課題

○『楽しい』『よく分かる』という児童の声が多くなった。

○教師の指示がなくても学習が進められるようになり,プリントへの書き込みも充実してきた。

○教師が児童の思考を予想し，一人一人へのきめ細かな対応ができるようになってきた。

△より児童の意欲を大切にするための発展的な教材や補充的な教材を開発する。

今年度の学習プリントへの子どもの書き込み状況をふまえ，改善を図る。特に発展問題について見直しをしていく。

△指導計画を見直し，単位時間ごとの評価規準をより明確にする。

（iv）成果の普及方策

・平成１５年度も学力向上フロンティア事業西濃地区協議会を開催する予定である。

・実践内容を随時ホームページに掲載し，リアルタイムで紹介していく。

ホームページアドレス：www.mirai.ne.jp/~ takasu1